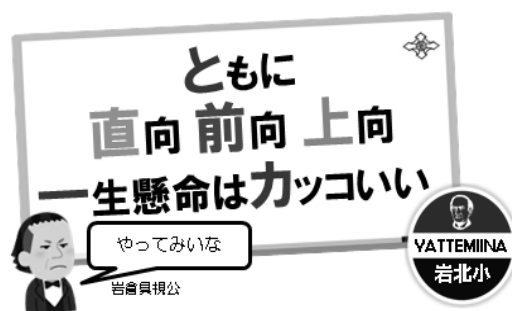


集団宿泊的行事とキャリア形成
～「自己実現・社会参画・人間関係形成」の力を育む集団宿泊活動～
京都府京都市立岩倉北小学校 校長 三浦 清孝

京都市立岩倉北小学校 学校教育目標

自らすすんで学び ともに築き
豊かに生きる 岩倉の子



I 学校の様子

本校は、京都市北部の岩倉盆地の北側にあり、昭和40年代の府営団地及び低層住宅の建設に伴う人口増加により、昭和49年に現在地で明德小学校北分校となり、昭和50年に岩倉北小学校として開校し、本年度で45年を迎える。校区には、東に瓢箪崩山、北西に箕裏ヶ岳があり、学校の北側には岩北山が隣接し、西側には賀茂川へとそそぐ岩倉川が流れており、住宅地を外れると、今も尚、田園風景が広がっている。まさに「山紫水明」の地のごとく、年間を通して豊かな自然にふれることができる。





現在は、児童数316名、13学級の中規模校であり、学校教育目標を「自らすすんで学び、ともに築き、豊かに生きる 岩倉の子」とし、キャリア教育を柱として「好きなことをする」「人のためにする」のモットーのもと、児童・教職員・保護者・地域が一体となり学校教育をすすめている。

また、平成26年度に全国小学校社会科研究協議会研究大会京都大会の第1会場校、平成30年度に全国小学校キャリア教育研究協議会京都大会の会場校として研究発表会を開催し、今年度は、文部科学省、京都市教育委員会、京都市都市計画局の研究指定を受け、教科教育並びにキャリア教育の研究を推進している。

II 本校の集団宿泊的行事

1 「集団宿泊活動」として

本校の集団宿泊的行事は、「集団宿泊活動」として3年生から6年生が実施している。

<p>六年</p>	<p>開校当初から、修学旅行を1泊2日で実施している。行先は、開校から昭和63年度までが伊勢方面、平成元年から平成14年度までが広島方面、平成15年度から平成30年度までが名古屋方面、令和元年度から広島方面としている。修学旅行後は、児童朝会で「平和」についてのメッセージを学年発表している。</p> <p>平成30年度より、3年生と合同で京都市左京区にある本市野外活動施設「花背山の家」に於いて冬季の集団宿泊活動を1泊2日で実施している。</p>	
<p>五年</p>	<p>昭和59年度から平成20年度まで、三重県志摩市にある本市の野外教育センター「奥志摩みさきの家」に於いて2泊3日で実施をしてきた。</p> <p>平成21年度からは、「花背山の家」で4泊5日の長期集団宿泊活動に切り替え実施している。</p>	
<p>四年</p>	<p>平成21年度から5年時に「花背山の家」で長期宿泊活動を実施することとしたために、新たに「奥志摩みさきの家」での2泊3日の集団宿泊活動を実施している。</p> <p>今年度からシーカヤックを取り入れたり、ナイトハイク時に光るブレスレットを使った「ペンライトアート」に挑戦したりと新たな試みを児童とともに楽しみながらすすめている。</p>	
<p>三年</p>	<p>平成30年度より、新たに上級学年と合同の集団宿泊活動を取り入れている。6年生と合同で京都市左京区にある本市野外活動施設「花背山の家」に於いて冬季の集団宿泊活動を1泊2日で実施し、4年時の2泊3日のプレ宿泊体験としている。</p>	

2 岩倉北小学校の長期集団宿泊活動

本校の長期集団宿泊活動は、平成21年度から5年時に「花背山の家」で4泊5日の実施を始めた。「花背山の家」は、左京区北部の山間部に位置し、平成5年度に開所した京都市野外活動施設である。登山や川での観察、フィールドアスレチック、冬季はスキー等の自然体験や、館内での陶芸体験、魚つかみ、野外炊事、ボルダリング、キャンプファイヤー等の体験活動、宿泊棟・ロッジ棟・テントでの宿泊や地域での民泊・宿泊施設での宿泊等、活動の選択肢や組み合わせは多く学校独自の計画を立てることができる。

本校では、昨年度から4泊5日の長期集団宿泊活動の期間中の2日目と3日目に「花背山の家」から離れ「山村都市交流の森」で1泊2日の集団宿泊活動を取り入れている。




る。移動1日目に川の観察、林業体験、花背地区の祭事体験を行い、宿泊施設に泊まり、2日目に登山に取り組んでいる。



Ⅲ 長期集団宿泊活動とキャリア形成

1 長期集団宿泊活動の「ストーリー」の具体

4泊5日の長期宿泊活動では、1日ごとに「仲間」「自然」「挑戦」「協力」「感謝」の5つのテーマ（目標）を定め、それぞれのテーマに応じた活動を組みこむことにより、5日間のプログラムをつなぐストーリー性を高めた活動内容としている。

そのストーリーは、

仲間	<p>1日目の「仲間」では、入所式の後に、まず野外炊事を取り入れている。事前に「カレー・クリームシチュー・豚汁」から班ごとに選択し、自分たちで決めたメニューを美味しく作ることで「仲間」と活動することに必然性を持たせている。また、野外炊事は、活動の結果が見えやすく「仲間」とともに食事をすることで、より強く「仲間」を意識することができるものである。</p> <p>夜には、「ボンファイヤー」を行い、2日目以降の活動について自分の「目標」を公言して、互いに認め合うことのできる集団づくりのスタートとしている。</p>	
自然	<p>2日目の「自然」では、場所を「山村都市交流の森」に移し、「花背山の家」よりもさらに自然豊かな環境での活動としている。</p> <p>川での活動や林業体験（間伐・薪割）等の自然の中でこそできる体験活動の後、ここでしかできない貴重な体験として、花背地区の祭事である「花脊松上げ」の「上げ松」づくりに取り組み、児童の「やる気スイッチ」を引き出している。</p> <p>活動後は、宿泊施設「翠峰荘」に泊まり花背地区の自然をさらに感じるようにしている。</p>	
挑戦	<p>3日目の「挑戦」では、「山村都市交流の森」を起点とし「大悲山三本杉」登山を実施している。大悲山の三本杉は、日本一の高さを誇り「挑戦」に値する登山であり、ゴールが分かりやすく達成感のある内容である。</p> <p>登山後に、花背山の家に戻り、家族にむけたハガキを作成し、5日目までにそれぞれの家に配達されるようにし、児童のがんばりを家族が知り帰宅を心待ちにできる状況をつくっている。</p>	

<p>協力</p>	<p>4日目の「協力」は、5校合同の「朝のつどい」から始まり、午前には陶芸体験「花背焼き」を実施している。この「花背焼き」については、同施設の体験活動となった当初からプログラムに取り入れており、陶芸体験の指導者も学校の状況をよく知り、兄弟で体験している児童もいる等、本校の長期集団宿泊活動には欠かせないものである。</p> <p>その後、2回目の野外炊事を児童主体で行い、夜間の活動としてキャンプファイヤーを全員で盛り上げることで「協力」の可視化と肯定的な帰属意識の高揚につなげている。</p>	
<p>感謝</p>	<p>5日目の「感謝」では、フィールドアスレチック、フライングディスクゴルフと同施設での活動を満喫し、昼食後に一人一人が1日目から4日目までの自身の振り返りをじっくりと見つめ「感謝」の気持ちをもって5日目の振り返った後、グループで共有する時間を設定している。</p>	

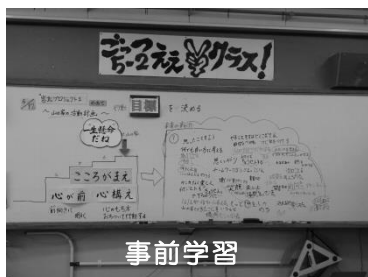
2 児童一人一人のキャリア形成からみる長期集団宿泊活動の効果

本校の長期集団宿泊活動の具体は上記のようなストーリー性を持たせた内容である。4泊5日の長期集団宿泊活動の「効果」が何であるかの答えは個人や場面によって異なるが、最大のポイントは「失敗」ができることであると捉えている。

「失敗」には様々な種類や質がある。やろうとしてできなかったこと、やったけどできなかったこと、友達間の意思疎通に関わること、自分の行動に起因すること等々、他者との関係や自己の行動など活動の多くの場面で「失敗」と向き合うことになる。

長期集団宿泊活動のねらいを「成功体感」とするならば、「失敗」は否定されるものである。しかしながら「失敗」で終わるのではなく、それを取り返すことができる「機会」や「時間」をつくることができれば、「失敗」は否定ではなく「学び」になり、児童のキャリア発達に大きく寄与するものになる。

そのためには、2泊3日や3泊4日ではなく、4泊5日の「時間」が必要である。期間中に互いの「失敗」を「我慢」することを続けるのではなく、4泊5日の「時間」の中で、「失敗」を互いに認め・受け入れ・取り戻すことのできる「機会」をつくることが、児童自身のキャリア発達を土台とした「自己肯定感」を構築し、集団としての質を一層高めることにつながる長期集団宿泊活動の「効果」であると考えている。



3 年間のストーリーを児童一人一人のキャリア形成につなげる工夫

本校の長期集団宿泊活動の目的は、「活動」を成功させることだけでなく、集団で「活動」することで個々のキャリア発達をすすめ、一人一人が育つことによって集団としての質を高め、よりよい人間関係を築くことである。この目的達成のためには、長期集団宿泊活動の5日間の活動内容のみに重点を置くのではなく、事前・事後の活動と振り返り、自己評価と他者評価を組み合わせ、児童自らが自身のキャリア形成を実感する1年間のストーリーをもつことが重要である。

1年間のストーリー性に重点をおいた一人一人のキャリア形成につなげるために、5年生では総合的な学習の時間の学年テーマを「キャリア教育」として設定をしている。今年度は「岩北プロジェクト2019」と題して、自らのキャリア発達を記録できるポートフォリオを作成し、1年間のストーリーを可視化できるようにしている。

ポートフォリオでは、4月に「なりたい自分」から始まり、その実現に向けて長期集団宿泊活動の事前学習を行い、自分で決めた3つのテーマに応じた行動目標を設定して宿泊活動に臨んでいる。期間中には、日々の振り返りとテーマごとの達成度の振り返りの自己評価を行い、それをグループで共有し相互評価をすることで集団としての高まることを意図している。事後学習では、自身のつけた力や学びを確かめるとともに「これからの自分」にむけたメッセージを残し、2学期の運動会や学習発表会での「なりたい自分」につなげている。

また、12月に、4月から12月までの自分を振り返り、次の学年である6年生の「なりたい姿」を「好きなことをする」「人のためにする」に2観点から描き、冬休みと3学期の行動目標を具体的に決める「キャリア・リフレクション」の活動を取り入れている。これらの1年間のストーリー性をもたせた活動を通して「メタ認知」に関わる力を育成しようとしている。

IV 「自己実現・社会参画・人間関係形成」のために

1 なぜ3年・6年合同集団宿泊活動なのか

本校児童の6年間で、「児童が自己決定する場面があるのか」「児童が役割を果たすことで自己存在感を得る場面があるのか」「児童がすすんで共感的人間関係を構築しようとする場面があるのか」の3つ視点で見つめた時、この視点こそが一人一人の児童のキャリア形成における本校の課題であると捉えた。

この3つの「場面」を1年間のストーリーの中に意図的・計画的に組み込み、事前・事後の活動とつなげて、児童自身がすすんで役割を果たすことができる取組として、花背山の家で1泊2日の3年・6年合同集団宿泊活動を設定している。

3年生と6年生の合同とした理由は、この2学年が3つの「場面」と「役割」の機会が不足していたわけではなく、この2学年ですすめることに価値があるからである。

6年生全体では、これまでの様々な取組の中で3つの「場面」と「役割」を果たす機会はあったが、一人一人を見つめた時に「必ずできた」わけではない。「場面」と「役割」があっても果たせなかったり、他の児童に任せてしまったりすることがあり、取組全体の見取りやねらいと個々の姿とは乖離する部分があった。そこで、6年児童一人一人に「場面」と「役割」を設定し、やりきることができ、認められることができ、

信頼を得ることができる取組として、3年生とペアで集団宿泊活動を行うこととした。

6年児童にとっては、5年時に4泊5日の長期集団宿泊活動で慣れ親しんだ花背山の家での活動であり、全員が自信をもって活動することができる。また、見通しももって絶対的に優位な立場で3年生と関わるることができる「場面」である。

一方の3年生は、お客さんとして参加するのではなく「初めての集団宿泊活動」をやりきることを目標としている。その不安が大きいほど、6年生の「役割」を果たす「場面」があり、6年生の関わりが3年生の安心につながり、6年生への絶大な信頼とつながっている。この3年生と6年生の関係性をつくるために、2学年の合同集団宿泊活動を実施している。

2 「なりたい自分」をかなえる集団宿泊活動

この2学年合同集団宿泊活動の時期は、2月中旬に設定している。この時期に実施することで、6年生は小学校生活最後の「役割」と「貢献」を果たし、自己有用感を得られ、卒業までの1カ月の「生き方」に大きなプラスを生み出している。

特に、これまで学級の中で力を発揮しきれていなかった児童にとって、3年児童からむけられる「信頼感」とそこから生まれる「自己有用感」は絶大なものである。ともすると日々の生活の中で自分自身を否定的に捉えがちだった児童が、3年生との関わりによって自身の行動や役割を肯定的に捉えることができるようになり、胸を張って卒業に向かう姿が見られるようになった。また、3年生にとっては、6年生との関わりによって「不安」を「安心」に変える経験が、高学年への憧れになるとともに、4年生で実施する2泊3日の集団宿泊活動への期待と自信につながっている。

本校にとって、「なりたい自分」をかなえるために、4年間の長いストーリーで綴られる「花背で始まり花背で終わる」集団宿泊的行事は必然かつ必要な学校行事である。

V 持続可能な集団宿泊的行事をめざして

集団宿泊的行事では、自然の中で学校ではできない様々な体験を通して、お互いのことを理解し、よりよい人間関係を築こうとする姿を見ることができる。また、その時間が長いほど児童相互の関係が深まり、「失敗」を「成功」に、「言い合い」を「折り合い」に変える機会をつくることができる。集団宿泊活動の効果は、誰しもが実感していることであり、児童にとって必要なものである。また、指導者も児童の変容を目の当たりにでき、大きな「やりがい」を感じる学校行事の1つである。

しかしながら、「効果」と「やりがい」を優先するあまり、引率者に過度な負担を強いると、集団宿泊的行事自体の持続が困難になってくると考えられる。昨今、「働き方改革」が叫ばれる中、集団宿泊活動の「効果」を認識しながらも「日数」や「時間」を減らすことに重点が置かれる等、長期集団宿泊活動が逆風にさらされているという現実がある。

長期集団宿泊活動の必要な時間を確保し、持続可能な指導体制を整えるには、引率者の勤務時間の割振り変更や休日の振替等を実際に行う学校体制が必要である。誰かが無理をする体制は「効果」があったとしてもいずれ破綻をする。そこで、「効果」と「やりがい」を担保するための効率的な指導体制づくりをすすめることが、これからの集団宿泊的行事を持続可能な学校行事にすることができると考えている。